

真夜中の

再会

隠れ里

ある、雷雨に見舞われた初夏の夜のこと……。

一人の男が、駅前にぼつりと停まっていた一台のタクシーを呼び止めた。

運転手がすかさず出てこようとするのを制し、彼はそのまま開かれたドアから後部座席に乗り込んだ。

「……お荷物は、トランクにお入れしなくてもよろしいですか？」

遠慮がちに、若干髪が薄い運転手が尋ねる。

突然乗ってきた客が片手に提げていたのは、大きなキャリーケースだったからだ。雨露に濡れたそれは、明らかに後部座席の半分以上のスペースを埋めてしまうに足る大きさだった。

しかし、男は一言も発さずに、首を横に振った。

「……。」

運転手は一瞬迷ったものの、すぐに気持ちを切り替え、運転席に戻った。

「……どちらまで？」

しばらく間を空けて、男が答えた。

「……中央公園まで、お願いします。」

男は、迷っていた。

果たして、これで本当に良かったのだろうか……と。

目の前でハンドルを切る運転手の背中を、ただじっと見つめる。

ふと足もとを見ると、自分の両足が小刻みに震えているのが分かった。

雨に濡れた寒さと、それから……例えようもない恐怖のせいだ。

他に道は無い。

それは重々承知している。そうするしかないのだから。

だが、これほど決断に時間がかかるとは思いもしなかった。

意を決した男は遂に、行動を起こさんとシートから腰を浮かしかけた。

その時……。

突然、反対車線の車のヘッドライトが、タクシーの車内をスポットライトのように照らし出した。

男の青ざめた顔が、バックミラーにはっきりと映る。

すると……。

今まですっかり黙りこくっていた運転手が、はっとして口を開いた。

「……三船？三船なのか？」

「……え？」

あまりにも予想外の展開に、男は慌ててシートに腰を下ろした。

何だ？

何故、こいつは、俺の名前を知っている？

数秒の間を空け、運転手は再び後ろの男に訊いた。

「……………三船、篤史君なのか？」

「……………お前は。」

こちらを向いた、いかにも人懐こそうな顔立ち、ドングリの様な目……………。

この男、どこかで？

ずぶ濡れの男の名は、三船篤史。

都会の企業に勤めていたものの、数年前、肩代わりせざるを得なくなった多額の借金が出来て以来、とても人には言えないような苦しい生活を強いられている。

明日食うものにも困る、という程では無かったが、それに近い辛さを味わった事も一度や二度では無い。

そんな三船が手をつけたのは、会社の金だった。

その苦し紛れのちっぽけな横領は、ほどなくして上司に、社長に知れる事となり、彼は当然の成り行きで「解雇」を通告された。

今更後悔した所で、もうどうにもならない。

頭では分かっている、それを認められない、認めたくない腹立たしさといったらなかった。

このご時世、一度会社をクビになった人間が、またすぐ新たな職に就くのは難しい。しかも、前の職を失った原因が、会社への裏切り行為にあたる「横領」ともなれば。

結局、貯金もほぼ底をつき、三船は僅かに残った金で逃げるように都会を離れた。

そして、故郷の小さな街へ戻ってきたというわけだ。

駅に隣接した公園で一夜を明かした後、三船は自らの金銭的余裕が限りなく0に等しい事を悟った。

とにかく、すぐにでも金が要る。金が無ければ飯は食えない。酒も飲めない。あたたかな風呂に浸かる事も出来ない。安全な場所で寝る事さえままならないのだ

金、金、金が欲しい！一人で生きて行けるだけの金が！

自分の情けない境遇を一番よく知っている以上、親戚や友人に頼るのは心苦しかった。なにより情けないし、相手にも多大な迷惑がかかる。

その内、そうも言っていられなくなるかもしれないのだが。

しかし、今はまだ、彼自身のプライドが許さなかった。  
昔から、自尊心が強い、時には強すぎると言われてきた。しかし、彼にとってはそれが「当たり前」の感覚だったので、別段おかしいことだと思った事は一度も無い。

いつか、俺は成功してみせる。  
この世界で立派に、胸を張って生きていく。

そうなる事がまるで必然であるかのように、三船は自信満々で今までの人生を歩んで来たのだ。

しかし、会社勤めが五年、十年と確実に長くなる内、三船は次第に不安に駆られていった。解雇を宣告されてからは、その不安の大きさは頂点に達していた。

本当に、これでいいのだろうか？

本当に、これが俺の望んでいたことなのだろうか？

俺が思い描いていた未来が、これだというのなら……。

それは、大きな間違いだ。

しかし、三船にはこれといった取り得もなく、かといって極端な短所がある訳でも無かった。

芸術の才能も無かったし、優れた分析能力も無かった。

ただ、「平凡」なだけだったのだ。

それなのに、傲慢なまでの自尊心をずっと保って生きてこられたのは、ある意味尊敬に値するが……。

そんな自虐的な考えにとりつかれる事もあった。

自分で、自分に、皮肉を述べる。

愚かなことだ。

愚かであるからこそ、やめられないのだ。

甘えていたのかもしれない。

そう思うこともある。

何もしなくても、自分は大丈夫。いつか、ビッグな大人になってみせるから。

そんな子供のような甘い考えに捕われて、人生を失敗した。

あの時、こうしていれば……。

あの時、真面目に勉強していれば……。

あの時、遊びに熱中し過ぎなければ……。

後悔するネタは尽きることが無い。

全く、おかしなものだ。

未来を見据えようとはせず、過去ばかり振り返って、自分をさげすむ事に密かな満足感を感じている。

最低最悪の男、いや人間だ。

俺は、何の為に生きている人間なんだ？

何の為に生まれてきたんだ？

何の為に此処にいるんだ？

何の為にこんな情けない暮らしを続けているんだ？

何の為に、何の為に、何の為に……。

ナンノタメニ？

両親とは、あの「横領事件」を知られた日以来、一切連絡を取り合っていない。

三船は孤独だった。

誰にもすがれず、誰にも声をかけられなかった。

そして、彼は決めた。

—————どんな手段を使ってでも、金を手に入れる。

全てをやり直す為に。

それが、人生に永久（とわ）に刻まれる汚点になろうとも。

煤けた赤いジャンパーの懷に、ホームセンターで買った真新しい包丁を忍ばせる。

鈍い光を放つ刃をじっと見つめていると、何故だか心が落ち着いてきた。

そう、これは試練だ。

俺の今後の人生の為に、避けては通れない試練。

果たして、俺は乗り越えられるのだろうか？

この「試練」、即ちタクシー強盗という犯罪を。

計画は簡単だった。

まず、どうしても荷物は持って行かなければならない。貴重な所持品はすべて、一つのキャリーケースに収めてある。

中に入っているものすべてが、それなしには生活がさらに困難になってしまう物だ。  
タクシーの運転手はおそらく、トランクに荷物を入れる事をすすめるだろう。しかし、言われた通りにしてはならない。  
強盗犯が、トランクに荷物を残して逃走？  
そんな事になれば、さぞかし間抜けだろう。  
キャリーケースの中には、その持ち主が「三船 篤史」である事を証明出来るものがごまんと入っている。手放すのは危険だ。  
他に、奪った金を入れるものも無い以上、どこかに置いて行くわけにもいかないではないか。  
計画の予定日は雨だと、道で拾った新聞に書いてあったが、そんな事はどうでも良い。  
天気に関心は無い。関心があるのは、金だけだ。  
どれだけの金を奪えるのか。  
それにすべてはかかっている。

翌日、三船は駅前で一台のタクシーを呼び止めた。

三船は、息を詰めたようにその男の顔を凝視していた。  
タクシーは、見知らぬ道の隅で停まってしまっている。  
そう、どこかで・・・どこかで、俺はこいつと会っている。  
いや、ただ会っただけではない。長い付き合いだった・・・学校が同じだったのだろうか。  
中学？高校？大学？  
あるいは、職場で何年か一緒に過ごした同僚か何かだろうか。しかし、それなら少なくとも顔くらいは覚えているはずだ。  
という事は、やはり学生時代か？  
と、その時、やはりこちらをじっと見つめていた運転手が、再び口を開いた。  
「覚えていないのか？・・・まあ、随分昔の事だからな。」  
・・・？  
「俺だよ、俺。  
鹿取だ。」  
鹿取・・・？  
確かに、聞き覚えがあるような名前だ。  
そんな気がしているだけか？・・・いや、やはりそうだ。

俺は、鹿取とかいう名のこの男を知っている。

「失礼ですが……。」

声を発した瞬間、自分の声が裏返っている事に気づく。

軽く咳払いをし、無意識の内に唇を何度か舐めた後、俺はまた話し始めた。

「……どちら様でしょうか？」

この言い方は少々まずかった。

相手は既に名乗っているのだから。

[鹿取]は、少しばかり憤慨した目で三船を見つめた。

「本当に思い出せないのか？」

中学校の時、ずっと同じクラスだった鹿取義也だ。よっ・ちゃ・ん！」

よっちゃん……。

よっちゃん……？

三船は、遙か昔の記憶を必死に呼び覚まそうとした。

実は彼には、あるジンクスがある。

小学校、中学校と、決して「二組」以外のクラスになった事がないのだ。

三年間同じ中学校にいたが、その時も確かに「二組」だったのを覚えている。

という事は、この鹿取義也という男、またの名を[よっちゃん]も、中学時代はずっと二組にいたはずだ。

やはりここは、訊いてみるのが一番だろう。

はじめの物騒な目的を一時的に忘れ、三船は思わず質問していた。

「……いくつか、訊きたい事があるんですが。」

「ああ、いいよ。」

———今の場面を第三者が見れば、タクシー運転手とその客の立場が完全に逆転している事に疑問を抱くかもしれない。

運転手に金を払う立場である客が非常に丁寧な言葉を使い、乗客を第一にすべき運転手がため口をきいている。

そんな奇妙な状況下で、三船は[運転手]に問いかけた。

「……通っていた中学校は、どこでしたか？」

突然鹿取がプッと吹き出したので、三船は驚いた。

「……？」

「くはははは……。」

鹿取はひとしきり笑った後、急に真顔になり、再び三船のほうを向いた。

「おいおい・・・俺を馬鹿にしてるのか？」

長松市立桜田中学校・・・桜田中に決まってるだろ。知ってて当たり前の事を何で・・・。」

そこで、彼ははっとしたように目を瞬いた。

当惑した顔で、まじまじと三船を見つめる。

そして、まさかと思った事を言った。

「お前、もしかしてまだ思い出せないのか？」

・・・居心地が悪くなった三船は、思わず視線を逸らした。

彼の問うた言葉が凶星だったからだ。

「・・・そうなんだな？」

三船は、答えられない。

気持ちを落ち着かせようと深く深呼吸した鹿取は、再び口を開いた。

「・・・よし。もう一度だけ自己紹介してやるから、よく聞けよ。

鹿取義也。あだ名はよっちゃん。お前と三年間、同じ中学に通っていた。」

鹿取の親切心から出た言葉は、三船にとって何の助けにもならなかった。

一体誰なんだ、こいつは？

————いや、名前は分かっているのだから、「誰なのか」が重要なのではない。

この「鹿取義也」という名の男が、どんな人間なのかが重要なのだ。

それなのに、俺は何も思い出せない。

途方にくれた彼は、再び鹿取に質問した。

「・・・クラスは？三年間のクラスを全て言ってみてください。」

少し不機嫌そうな鹿取は、ぶっきらぼうに答えた。

「クラス？ああ、一組とか二組の事か。別にいいよ。

一年二組、二年二組、三年二組。・・・おお、二組じゃなかった事は一度もないんだな。

今まで意識した事も無かったが。」

・・・やはりそうか。

三船は、鹿取に正直に言う事にした。

「・・・すまない。」

「ん？何がだ？」

彼は、鹿取が慌てるほど深く頭を下げた（が、もちろん本心から謝っている訳ではなかった。

もしかしたらそのまま、タクシー強盗に移行するかもしれないのだから）。

「・・・君の事を、全く覚えていないんだ。思い出せそうにもない。」



「……。」

鹿取はあぜんとした。

「おいおい、幾らなんでも……それはないだろう？小学校で一、二年一緒だったっていうんじゃない。中学校で三年間ずっと、友達だったってのに……。」

「信じられない気持ちは分かるが……。」

「……でも、本当なんだな？」

三船はゆっくりと頷いた。

「ちっ……。」

鹿取ははっきりと（相手の耳によく響くよう気を使って）舌打ちし、三船をにらみつけた。

「じゃあ、思い出させてやる。……こんな言い方をしたら、まるで恨みがあるみたいだな。

お前、卓球部だったろ？」

「……？」

唐突な鹿取の発言に、三船は一瞬返事が遅れた。

「……ああ、中学の時の部活か？……卓球部だったが。」

「じゃあ、覚えてるはずだぜ？」

この言い方……。

つまり、この男は自分と同じ卓球部の部員だったという事か。

自分と、そして鹿取も通っていたという桜田中学校は、街の小ささもあってもともと人数が少ない学校だった。

当然、部活動に所属している生徒も少なかった。

野球部やサッカー部といった、いわば「定番」の部活はまだしも、自分がいた卓球部はとにかく人手不足だったことを覚えている。

市の大会の団体戦になんとか出場できるような人数だった為、当然その実力は目を覆わんばかりだった。

一回戦を突破するのに苦勞するようなチームだったが、不思議と結束力があり、どんなに負けても明るい雰囲気崩れる事は無かった。

「……思い出したか？」

気がつくやうに、鹿取が期待に満ちた眼差しでこちらを見ていた。

三船は、反射的に頷いていた。

「……ああ。」

——嘘だった。

何故だろう？

どんなに記憶の糸を辿っても、その先が「鹿取義也」という人物に落ち着く事は無かったのだ。

記憶力には自信があった（これだけは自分の傲慢ではないと信じていた）。それだけに、この男の顔も、背格好も、性格も、「どこかで会った気がする」というだけで、殆ど全て思い出せないというのがいまだ不思議でならない。

では、どうするべきか？

三船は、必死に考えた。自分が持てる知識を総動員して考えに考えた。

そして、ごく普通の結論へとたどり着いた。

演技をしよう。

この鹿取という男が、かつての友人との再会を存分に楽しめるように。

「友人」に、いや、自分自身になりきる。

それは、ある意味最も簡単で、最も難しい演技だった。

しかし、他に彼に残された道は無かった。

「しかし・・・本当に久しぶりだな。」

取りあえずそういつてみたものの、その先が思い浮かばない。

なにせ、彼との思い出も、かつて交わした会話も、一切覚えていないのだから。

覚えていない、というより、「知らない」といった方がふさわしいかもしれない。

それだけ、三船はこの男について何も分からないままだった。

「ああ、確かに。久しぶりだな、篤史。」

鹿取の返事も、どこかぎこちなかった。

まだ疑いを捨てきれしていないのだろうか。本当に自分の事を思い出してくれたのか、という疑念を。

演技を始めたばかりだというのに、早くも三船は焦り始めていた。

まず、何を話していいのかが分からなかった。共有できる記憶が無いのだから無理も無いが。

だが、とにかく口を開いて喋り続けなければ、嘘は容易く暴かれてしまう。

意を決した三船は、再び話し出した。

「悪いな、なかなか思い出せなくて。最近俺もいろいろあったんだ。」

—————「いろいろ」の一言で様々な物事を省略してしまう事が増えてきた。これも歳のせいなのだろうか。

些細な失敗からストレスを抱え込む事が多くなった。ほんの少し叱責を受けただけで極度に落ち込んでしまう事も、日常茶飯事になっている。

はじめは、これが「大人になった」というやつか、等と気楽に考えていたが、そんな出来事が続けば続くほど、彼は何か「追い込まれている」という気がしていた。

どこにも逃げ場がない場所へと。

「・・・そうか。」

短く応えた鹿取は、重苦しい空気を振り払おうとするかのように唐突に話題を変えた。

「やっぱり、お前もあの頃とは随分変わったよな。」

「あの頃・・・って？」

「学生だった頃だよ。」

もっと、何ていうかな・・・肩の力が抜けてたっていうか・・・のんびり生きてた気がするんだ。・・・俺がこんな事を言うのもおかしいが。」

鹿取は一度息をつき、続けた。

「今のお前は、色々な物を抱え込んでるように見える。」

「・・・。」

・・・まさに凶星だった。

つい先程まで自分が考えていた事を告げられ、三船はどきりとした。

「そりゃ、俺もお前も大人になったんだし、抱え込むしかない事だっただけ増えてきたとは思うが・・・。でも、やっぱり息抜きは大切だぜ？たまには体と心を休めないと・・・。」

鹿取の言葉を、三船は半ばBGMのように聞き流していた。

彼の言葉は無意味だ。

思わず冷笑しそうになる。

「たまには、体と心を休めないと」？

今のような生活を続けていてはとても無理な話だという事位、彼は分かっていた。

何も知らない鹿取には悪いが、俺は崖っぷちに追い込まれているのだ。

踏み止まれなければ、断崖から転落してしまう。

手を差し伸べて助けてくれる人もいない。

彼は一人だった。

孤独だった。

だから、ついこんな一言を言ってしまった。

「何故、そう僕にかまうんだ？」

その時の鹿取の表情は実に見物だった。

「おっ・・・おま・・・お前・・・。」

鹿取は、何かを言おうと口をぱくぱく動かした。しかし、その殆どが意味のある言葉になっていなかった。

三船は、彼を怪訝な表情で見つめた。

「何だ？」

「何だ・・・って言われてもだな・・・。」

鹿取は、心底あきれたというように首を横に振った。

「まったく・・・お前って奴は・・・。」

言葉は続いている。だが、彼の言わんとしている事はなんとなく分かった。

三船は、ふっと溜息をついた。

彼はこう言いたいのだろう。

「久しぶりに会った友人と、ほんの少しの間語らう時間さえも惜しいのか？」と。

そして、三船をそれほどまでに追い詰めているものが何なのかも知りたいに違いない。

一瞬、思い切って自らの悲惨な境遇を明かしてしまおうかとも思った。

しかし、彼の己の分以上に高い自尊心がそれを妨げた。

何故、自分の印象を自分で落とすような真似をしなければならない？

それこそ、愚かな行いだ。

真実を告げるとするのは、時に大きな恐怖を伴う行為だという事を、三船は改めて実感した。

とても言えない。言えるはずも無い。

彼は恐れていた。

「三船篤史」という人間に対する価値観が、自分の一言で大きく変わったものになるかもしれないという事実を。

だから、何も言わなかった。一言も発さず、鹿取が再び口を開いてくれるのを待った。

「・・・まあ、いい。人には人の事情って物があるからな。いつかは俺に話してくれよ？」

彼は、半ばあきらめたような顔でそう言い、エンジンを吹かした。

再び夜の街を走り出したタクシーの中で、三船はぼんやりと窓の外を見つめていた。

こんな事でいいのか、と迷っていた。

何故俺は、そう自分を「より良い人間」に見せようとするのだろうか？

人は人なのだ。自分は自分なのだ。それが普通なのだ。

ならば、俺は「普通」ではない、という事か。

三船は葛藤していた。

俺は、どうしてこうも駄目なのか。

自分を偽る。誤魔化す。そうやって生き続けている。

そんな人生に意味などあるのか。

三船は、暗闇に向けて自問自答する。

考えてみれば、そもそもこの計画自体が無茶な事だった。

タクシー強盗で奪える金額等たかが知れている。警察に逮捕されれば、むしろ今後の人生が危うくなる。

では、何故？

何故、こんな計画を立てたのか？

・・・追い込まれていたからだ。

いや、違う。

「追い込まれた」と思っていたからだ。

借金があるからといって、生きていけない訳ではない。

住む場所がないからといって、生活できない訳ではない。

叱責を受けたからといって、いつまでも落ち込んでいる事はない。

全てを抱え込む事はないのだ。

そもそも、「追い込まれている」という表現自体が、可笑しい、空しいものなのかもしれない。

誰かのせいでそうなった訳ではない。自分のせいでそうなったのであれば、それは「追い込まれた」のではなく、「追い込んだ」のだ。

自分で、自分を、追い込んだ。

それが現実だ。

—————タクシーは、依然静まり返った街を走っていた。

車の量は少なく、通行人はほぼ皆無に等しい。

既に二十三時を回り、日付が変わろうかという時間帯だ。無理もないだろう。

三船は、依然ぼんやりと窓の外の闇を見つめていた。

その時だった……。

「……おい。」

鹿取に呼ばれる。

「何だ？」

「……そろそろ、中央公園に着くんだが。」

「え？」

—————そういえばそんな事を言った。

「計画」を胸に秘めてタクシーに乗り込んだ時、まず最初に鹿取に目的地を訊かれた。何も考えていなかった俺は、とっさに幼い頃母と遊んだ中央公園の名を出したのだった。

その場所に特に用があった訳ではない。

しかし、もうこんな所まで来てしまったのだから、今更「公園へは行きたくない」とも言えないではないか。

「……金は、いいからな。」

唐突に、鹿取が言った。

三船は一瞬彼の言葉の意味を理解出来ず、首をかしげた。

そんな彼の様子に気づいたのか、鹿取は苦笑して続けた。

「料金だよ、料金。タクシー代だ。」

久し振りにお前に会えただけで十分だ。金は要らない。……そういう意味だ。」

そう言った時の彼の表情は、実に晴れやかだった。

幸せに満ちていた。

三船は、そんな鹿取に何も言えなかった。

深い罪悪感が、彼の心を疼くまで苛んだ。

彼は、鹿取義也というこの男は、俺と再会した事を喜んでいる。

無二の友人だったという、俺と再会した事を。

それなのに、俺はどうしたことだ。

彼を思い出すことさえも出来ないのか？思い出に浸ることも、昔話に花を咲かす事も出来ないのか？

苦しかった。悔しかった。

いっその事此処から逃げ出して、何処かへ消えてしまいたくなった。

思わず、また車外に広がる暗闇へと目を逸らしてしまう。

窓ガラスに映る彼自身の顔をじっと眺めている内、三船は奇妙な感覚に襲われた。

急に、自分自身を客観的に観察出来るような気がしてきたのだ。

何故だかは分からない。

しかし、そんな心境に陥る事自体が、彼にとって初めての経験だったし、新鮮な気分でもあった。

その男は、妙に疲れた目をしていて、体全体から「負」のオーラが滲み出ているような、ひどくやつれた風貌だった。

瞳の奥には見るものを不安にさせるような危険な光が宿り、口元は「この世の全てが信用できない」とでも言いたげに歪んでいる。

—————本当は、「あの時」に気づいていたつもりだった。

借金を背負わされ、職を失い、無茶な犯罪計画の実行を決意した時に。

自分は最低で最悪の人間なのだと、過去ばかりを振り返る人間なのだと、自尊心が強過ぎる余り他人に頼る事も出来ないつまらない人間なのだと……………。

それが真実なのだと、信じて疑わなかった。

だが、それが全てでは無かった。

俺は、まだ変わる事が出来る。

今、俺の目の前には、かつて俺の友だったという男がいる。

昔からずっと、自分が「最低最悪」な人間だったのであれば、そんな事はあり得ないはずだ。友達が出来るとは思えないのだから。

鹿取はついさっき、「のんびり生きていた」三船篤史の話をしてくれた。物事を抱え込まず、肩の力を抜いて生きていた俺の話をしてくれた。

その頃のように生きる事も……………不可能ではないはずだ。

初めからあきらめていてはならない。

鹿取にこの話をされた時、俺は何故そう自分にかまうのかと自立しきれない反抗期の子供のように言った。

彼は、俺のためを思って言ってくれたのにもかかわらず。

俺には、俺を心配してくれる人がいる。俺の事を真剣に考えてくれる人がいる。

いや・・・。

「人達」がいる。

きっと、鹿取一人だけではない。もっと沢山の人が、俺の事を想ってくれていたはずだ。俺が気づかなかっただけで。気づこうとしななかつただけで。

だから俺は、このままではいけないのだ。

今後の人生を、真剣に考えなければならない。

その人達の為にも。

「犯罪を犯して金を手に入れ、そこから人生をやり直せばいい」等という甘い考えは捨てて。

もし、今日俺が、鹿取義也の運転するタクシーに乗らなければ、こんな考えを持つ事は決して無かつたろう。

平然とした顔で運転手の喉元に包丁を突きつけ、車内にあるだけの金を要求したに違いない。

俺はそういう人間だった。

そう、「だった」のだ。

三船は笑みを浮かべた。歪んだ感情も、鬱屈した思いも表れない、ごく自然な微笑みだった。

俺は、今、この瞬間から変わる。

もう、道を誤る事は無い。

二、三分後、タクシーは常夜灯のか細い灯りが目に付く中央公園に着いた。

「・・・おい。」

鹿取が呼ぶ。

「・・・ああ。」

三船は、気の無い返事を返した。



左手にあるドアが音も無く開く。

なんとも言えない気分に戻っていた三船は、ゆっくりとシートから腰を上げた。

どういう訳か、寂しかった。

鹿取の事は未だに思い出せず（本人に気づかれないよう細心の注意を払ったつもりだった）、タクシーに乗っていたのはほんの数十分程度だったというのに。

彼が固いアスファルトの地面に降り立つと同時に、鹿取も運転席から降りた。

車内から漏れ出る僅かな光の下で、二人は一言も発さずに見つめあった。

「・・・じゃあな。」

沈黙に耐えかね、鹿取が先に口を開いた。

「ああ・・・元気で。」

「おう。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

別れの挨拶は終わった。

三船は、躊躇いながらも身を翻してその場から立ち去ろうとした。

————その時だった。

突然、鹿取が話し出したものだから、三船は驚いてその場に固まってしまった。

「そういえばさ・・・。」

かれの口調はやけに明るかった。

しかし、言葉の内容はそれとまるで合っていない。

「お前に言いたかった事があるんだ。」

「・・・何だ？」

————聞くのが怖い。

しかし、彼は待ってくれなかった。

「お前、本当に俺のこと、思い出してたのか？」

「・・・・・・・・。」

「思い出してなかっただろ？」

「・・・・・・・・。」

「俺だって、バカじゃない。・・・とっくに気づいてたんだからな。」

「・・・・・・・・。」

————怒っている。明らかに怒っている。

逃げ出したかったが、まるで足が動かない。

「……………そうなんだろう？」

「……………ああ。」

肯定するしかなかった。反論したいのだが、ここまではっきり言われてしまうともうそれも不可能な事に思えた。

背後で溜息の音が聞こえる。

「時間がかかってもいいから、思い出せ。俺はずっと待ってるから。この街で、このタクシーの運転手をしながら……………さ。」

車体をポンポンと叩く音がした。

ようやく動けるようになった三船は、そそくさと公園を後にした。顔が火照るほど照れくさかった。

雨水に濡れた路面を走る、一人の男の足音だけが、真夜中の街に響き渡っていた。

了

